

館内見学ツアーに参加して

文芸学部助教授 高木宏幸

1. 中央図書館の変化

五年半前の春、初めて中央図書館を利用したときの印象は、今とは大きく違っていた。当時の検索システムは、すでに一般的だった各大学のOPACと比べてずいぶん古めかしい操作方法で、反応速度も非常に遅く、途中で検索をギブアップすることが多かった。検索結果を見ると存在するはずの少々古い洋書や洋雑誌を探しに行くのは、ちょっとした宝探しにでかける気分だった。その上、洋雑誌が保管されている七階へ行くために乗せられたあの小さなエレベータの中では、閉所恐怖症の気がある私は、思わず目をつぶって念仏を唱えていた。

しかし、である。この五年半で、中央図書館は驚異的に進化したと言ってよい。ウェブ上のサービスや情報が充実したとか、導入されたOPACの画面がとても使いやすとか、データベースがどんどん充実しているとか、文芸分室ができてEキャンパスの住人としては非常にありがたいとか、おまけにオンラインで個人の借り出し状況をチェックしたり共同利用の申請ができるようになったりしたとか、単にそういうことだけではない。このようなハード面や制度面の充実が、図書館をぐっと親しみやすくしたと思う。それは、学生たちの行動からよく分かる。

着任直後、緊張しながら初めて担当したゼミ生たちに図書館へ行って資料を借りてくるように指示した時のことだ。なんと、それまで三年間も近畿大学の学生をしてきて、その間、図書館を一度も利用したことがないと言うのだ。それも一人や二人ではなかった。妙な精神的距離感が学生たちと図書館の間にあるだけで

なく、中には、中央図書館の場所も知らない者までいて、これには体の力が抜けた。

あれから五年半。何がどう変わったのか気づかないうちに、事態は好転している。今のゼミ生たちは、研究室のPCから必要な資料を検索して、コンビニでお菓子を買うときのような気軽さでパッと借りてくる。試験期間でもなくても図書館にすることが当たり前のようにになっている人もいて、優秀な人は自分からリサーチするようになるし、卒論のテーマもバラエティー豊かになった。なるほど、よい大学にはよい図書館があると言われるのは、こういうことかと実感する。

ちなみに、私が担当している大学院生は車椅子使用者で、文献のコピーを手伝ってくれる職員さんにとっても感謝している。というのも、コピー機は操作盤の位置が高く、そのままでは車椅子使用者が一人で使うことはできないのだ。車椅子使用者が乗っても安全な、台のようなものを用意しておくのはどうだろうか。また、自動貸出機も、車椅子使用者には操作位置が高すぎて使えない。ここにも台があれば、助かる人は多いだろう。車椅子使用者の利用を想定した機器もあるかもしれない。「ユニバーサル・デザイン」の点からの検討が重要だ。

そういった「さらに良くするための要望」はあるにしても、今の中央図書館に私はなかなか満足している。(あのエレベータだけは乗るたびに寿命が縮まりそうなので、今は階段を使うことにしている)。「批判してなんぼ」の仕事をしている研究者の端くれとして、自分が勤務する大学の施設を手放しで誉めるのもどうかと思うが、実際、他大学の図書館と比べても、かなりいい線を行っていると思う。

これまでご尽力されてきた、そして日々ご尽力されている方々に感謝したいと思う。

考えてみれば、大都市の大学も地方の大学も、総合大学も単科大学も、有名大学もそうではない大学も、同じように「国際化」や「IT化」といった限定されたパラメータ上で競争することを余儀なくされている時代にあって、これからは、大学の「力量」が判断される基準が、ファッションブルなキャッチフレーズとは違ったところ、もっと大学として本質的なところに立ち返ることになるに違いない（その傾向は、大手予備校のサイトですでに実感することができる）。それは、図書館に代表されるような、実質的な教育・研究体制の充実度と、学生が在学中にどれくらい知的に成長しているか、ということだと思う。この意味で、中央図書館の充実ぶりは、図書館だけのことではなく、より広い戦略的な意義を有しているに違いない。要するに、よい図書館を持つというのは、「ちゃんとした研究・教育をする大学」であることの証拠みたいなものだろう。

2. 館内見学ツアー

前置きが長くなってしまった。中央図書館に「館内見学ツアー」があるということを知り、6月、今年から始まった基礎ゼミの一年生10名を連れて参加した。ある会議で司会をしていらした先生が、「図書館の見学ツアーがとても良かったですよ」とおっしゃっていたのが記憶の片隅にあったことと、「基礎ゼミをマジメにやるなら、まず図書館からだ」という気持ちがあったことから計画したのだが、これが想像以上によかったので、少々書いておこうと思う。

基礎ゼミを担当することになって、どのようなことを扱えばよいだろうかと春休みに悶々と悩んだ挙句、たどり着いた結論は結局普通のことだった（実際にやり始めると、なかなか大変だったが）。それは、学生が自分でテーマを決めて英語でリサーチペーパーを仕上げることである。

テーマを決める、文献を探す、論を組み立

てる、執筆する、という流れを実践してもらうことに加えて、（欧米の大学ではあれほど厳格に指導するのに、日本の大学教育ではあまりにも無頓着な）引用のルールを学んでほしいと思った。

提出されたレポートについて、「これ、どこかの本の丸写しでしょ？それなら、どの本から採ってきたのかをきちんと書かないとあかんよ」言うのと、「でも、そんなことしたら自分の意見がほとんどなくなってしまいますし・・・」という、どう考えても非論理的なやり取りを何度も経験してきた私は、とにかく引用のルールとその意義を早いうちに教えたかった。そして、この手の授業をするなら、とにかくまずは図書館の使い方とその存在意義を知ってもらわなければならない。というわけで、館内見学ツアー参加を決意したのだ。

ツアーに参加するには事前の申し込みが必要だ。二階の総務課で申し込むのだが、なんと、ツアーをある程度カスタマイズできるという。つまり、自分たちのツアーで特に重点的に説明してほしいことをあらかじめ伝えておくと、リクエストに沿って内容や時間配分を考えてくださる。われわれのツアーは、英文の学生ということもあって、通常の館内案内に加えて、洋書、洋雑誌、語学書、データベース検索の紹介を特に詳しくお願いした。

当日は朝から快晴。絶好の館内ツアー日和で、しかも、朝一番の授業にもかかわらず、遅刻者ゼロという優秀さである。ピクニック気分で、Eキャンパスから図書館まで新緑の銀杏並木を歩くと、頭上では鳥がさえずっている。小学校並みの規模の大学を卒業した私にとって、この「絵に描いたような」キャンパスらしさは、なんともいえない。

集合場所である二階の演習室では担当の職員さんがすでに待機してくださっていて、前面のスクリーンには、中央図書館のウェブサイトが映し出されている。ここでは、スクリーンを見ながら、ウェブ上でできることの説明である。

検索方法を中心に説明いただいたが、あとで参加者に感想を聞くと、ここで見せていただいた検索の実演に、まず驚いたようだ。実演では「著作権」というキーワードで資料を検索してくださったのだが、実に500件近い和書がヒットした（今検索してみると、479件だ）。その後さらに、データベースの検索の仕方を教えていただき、新聞の記事の検索や電子ジャーナルの検索と続く。

「高校の図書室とはどうやらレベルが違うようだ」と感じてくれた様子で、それまで眠そうな顔をしていたミンさんも、ゴソゴソとメモを取り始めた。何百人もの専門の研究者がどんどんと各分野の資料を追加している大学の図書館に親しんでいる私たちには大学図書館のイメージができあがっているのだが、入学したばかりの一年生にとって、図書館といえば高校の図書室を基準に想像する。「大学の図書館では、何でも調べられそうぞ」という印象をもってもらえれば、このツアーの目的の大半は達成だ。

演習室での説明ではなかば強制的に期待感をもたされ、いざツアーへ出発。まずは、各階のカウンターや手続の仕方、閲覧室、書架の説明をしていただく。語学の学生たちなので、英語教育や文法関係の書架を詳しく案内していただいた。担当してくださった職員さんの後ろについてぞろぞろ歩き、あちこちで立ち止まって説明していただくわけだが、静かな閲覧室なのに、こちらは治外法権で全員に聞こえるような声を出して説明してくださるので、朝早くから閲覧室にいたまじめな学生たちが、迷惑そうな顔をしてこちらを見る。そんなことに無頓着な、というか、気づく余裕がない一年生たちと、迷惑そうな上級生たちの心理的なギャップが面白い。

洋雑誌のコーナーで説明を受けていた時だ。狭い書架の間に立って説明を受けていたものだから、後ろの方にいた数人には職員さんの声あまり聞こえず、最後尾の二人が、近くのジャーナルを手にとって、ひそひそ話をしていた。耳をそばだてて聞いてみると、「こ

れって、理系のんやなあ」「わけ分からんな」「当たり前や」「近大って医学部とかあるしなあ」などと言いながら、英語で書かれたジャーナルの論文をバラバラとめくっている。専門的な資料がたくさんありそうだという感想を持ってもらえたようで、ツアーの目的は達成直前である。

いよいよ書庫に入る。手続の説明の後、ほこりっぽい空気をかき分けるようにして、書架の間を縫い、階段を使って七階までぞろぞろと歩いたが、この頃には、学生のみなさん、なんとなく図書館のコレクションに対する敬意のようなものが生まれていたように思う。中国から来た留学生のミンさんは、中国文学に関する古そうな本を見つけて嬉しそうな顔をしている。また、入学直後、「私、本が大嫌いなんです！」と宣言していたHさんは、本がびっしり詰まった書架の前でじっとしている。大嫌いなものを一度に大量に見て気を失っているのかと思ったが、よく見ると、それらの本をしげしげと眺めている様子だ。書物に対する印象が少しは良くなっただろうか、などと思いながら書庫を出る。

3. おわりに

私は図書館に一種の神秘的なイメージを持っていて、それは間違いなく、小学校の図書室掃除当番だった時の印象から来ている。どういうわけか、その図書室の書架には一冊だけ英語で書かれた本が置かれていて、もちろん小学生に読めるはずはないのだが、図書室の掃除当番がまわってくるたびに、その本をめくりながら何が書かれているのかを想像するのが好きだった。日本語の本と同じように、その本も、英語が分かる人が読めば意味が分かるはずなのに、自分にはまったく訳が分からないという「リアルな不思議さ」を感じていたように思う。（もしその本が意図的にそこに置かれていたのなら、かなりよい仕事をする小学校であった。）

たしかに、言葉だけで説明されるのと、実際に手に取ったり歩いたりして経験したこと

をイメージするのとでは、呼び起こされる感情のリアルさに圧倒的な違いがある。授業一回分を使って図書館の使い方を案内していただき、何のことやら分からない論文が載っているジャーナルを眺め、書庫に入って急な階段に文句を言いながら七階まで登ることの意義は、ちょっと大げさに言うと、図書館に蓄積された未知の情報へアクセスすることに現実感を感じるようになることだと思う。

その二ヵ月後、「本が大嫌い」だったはずのHさんが提出したりサーチペーパーは、いくつもの文献をしっかりと引用して、さらに自分でインタビューまでおこなってまとめた秀作だった。入学したばかりの一年生がきちんと引用をしながら9ページの英文をまとめるには相当のエネルギーが要ったはずで、そのエネルギーの量と、入学直後の「本が大嫌い」発言の無邪気さとの格差は、館内見学ツアーで得た「現実感」が生み出したのかもしれない。

[2004.10.1記]